

II 特別連載 II

科学技術  
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第294回

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラムでも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構（JST）では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、また新たな交流に向けた準備のために、各機関によるオンラインプログラムへの支援を続けている。今回は香川大学とJSTが実施したオンライン大学訪問（中央大学）について紹介する。

## 香川大学の活動報告



紀伊 雅敦  
（香川大学創造工学部  
建築・都市環境コース教授）

### 日タイの学生が オンラインで都市交通学ぶ

2021年11月10日と12月15日、「持続可能な都市交通」をテーマにおき、日本とタイの学生たちが住む町の将来の交通政策について議論する研究交流プログラムを開催しました。香川大、中部大、タイのカセサート大学アジア工科大学院（AAIT）、チェンマイ大学で都市交通分野について学ぶ修士以上の



チェンマイ大学の発表



カセサート大学Varameth先生

から賞賛の辞を得るとともに、本プログラムをファシリテートした紀伊からは日・タイで研究交流を継続することを期待するコメントを投げかけました。

なお、本プログラムではJICA-IST SATREPS「Thailand40を実現するスマート交通戦略プロジェクト（STITA）」における、若手研究者の育成プログラムと位置づけられており、当該プロジェクトの参加機関が中心となってプログラムを設計しました。本交流により、日タイの学生、若手研究者間の交流が促進されるとともに、STITAでの若手研究者がさらに活躍することを期待しています。

学生、約30名がオンラインプログラムに参加しました。

初日のセッションでは、まず、林良嗣（中部大）教授が、基調講演「Limits to Urbanization and Motorization - Mobility as SABAI Happiness for Bangkok」を発表し、特にQuality of Life（QOL）の考え方を紹介しました。

その後、各大学の所在都市の交通政策について、カセサート大Varameth Vichensan准教授、チェンマイ大学Nopadon Kromprasert准教授、東京大学・宮崎浩之特任助教、香川大・紀伊が紹介しました。これらを参考に、参加した学生たちは、2050年までの交通政策の方向性を議論し、関連する政策などをオンラインホワイトボードに書き込みブレインストーミングしながらプレゼンテーションを作成しました。

12月の最終セッションでは、バンコク市、チェンマイ市、高松市、名古屋市の交通政策について発表しました。例として、チェンマイ大は、2050年までに完全に電気自動車化する政策目標設定や自動運転の普及などを提案し、カセサート大は、高齢化社会について着目し、バンコクの交通政策の在り方を提案しました。一方、日本側は香川大が高松市の交通網問題を現状分析し、将来の交通ネットワークを具体的に提案しました。また、中部大へタイから留学している

「Tiphakorn」氏は、バンコクと名古屋市を比較しつつ、AIを活用した2050年のバンコクの交通政策について、特にQOL向上を目指した提案を投げかけました。各プレゼンは非常にクオリティが高く、各大学の担当教官をファシリテートした紀伊からは日・タイで研究交流を継続することを期待するコメントを投げかけました。

## SSP オンライン大学訪問〜中央大学〜

JST さくらサイエンスプログラム推進本部

JSTは2月2日、中央大学との共催により、第11回さくらサイエンスプログラム(SSP)オンライン大学訪問を開催した。本イベントは、JSTが海外の高校生・大学生にオンライン疑似訪問体験を提供し、日本の大学について彼らの関心を高め、日本留学への意欲を高めてもらうことを狙いとして実施している。

イベントは、同大後楽園キャンパス内の講義室を会場として午後3時よりZoomウェビナーでライブ配信された。タイやマレーシアなどアジアの国・地域を中心に27カ国1800名を超える参加者数となり、イベント中には海外視聴者から約200の質問がウェビナー質問箱に投稿された。

プログラム冒頭、白井宏副学長より挨拶、および大学概要が紹介された。同大の建学精神「實地應用ノ素ヲ養フ」について紹介があり、卒業生は経済界をはじめ、行政、スポーツ・文化と幅広い分野において第一線で活躍し、この理念を体現していると話した。また、写真や動画を使つての多摩キャンパス、そして2020年に開設したばかりの国際教育寮の紹介に、視聴者からは「こんなすばらしいキャンパスで勉強できるなんてうらやましい！」との声が多く挙がった。

ラボツアーでは、中村太郎教授のバイオメカトロニクス研究室からライブ中継。ミミズやかたつむり、ゾウの鼻など生物の動きに着目した「バイオロボット」、空気圧や電気粘性流体、ゴム素材を用い人間と共存する次世代「ソフトロボット」を研究室の学生8名にデモンストレーションを行つてもらった。海外視聴者は、実際自分が研究室にいるかのような感覚を得たようでした。「初めてみる実演に



大坪准教授

白井副学長



中村教授(中央)と研究室の学生のみなさん



Q &amp; Aセッション

中央大学のアーカイブ  
URL:<https://ssp.jst.go.jp/EN/jst/online12.html>  
「オンライン大学訪問」トップページ  
URL:<https://ssp.jst.go.jp/EN/jst/online.html>

魅了された、Cool!!!」「研究室の雰囲気がとてもフレンドリー!」「私も一緒に研究がしたい」との感想が寄せられた。  
「Mock Lecture」では、実験経済学・行動経済学を専門とする大坪弘教准教授に「ゲーム理論と人間行動」をテーマに講義が行われた。冒頭、大坪氏から視聴者に「Let's play a simple game!」と、Zoom Split機能を用いたクイズを出題し視聴者の興味を惹きつけた。「複数の意思決定主体が相互に影響するような状況における意思決定行動」についての解説に、「心理ゲームみたいでわくわくした」「たった25分の講義だったが、ゲーム理論への興味を掻き立てられた」と大好評だった。

パネルディスカッションでは同大留学生のカシユイさん(マレーシア出身)とショウウカイリンさん(中国出身)に、自身のキャンパスライフを話してもらった。「コロナ禍ではあるが充実した毎日を送り、日本の生活を満喫している」「訊ねることを恐れずに。教授も日本人学生もとても親切で助けてくれた」と留学を希望する視聴者にアドバイスした。

今回含めこれまでのイベントの視聴者は約8割が高校生だが、高校教員・大学職員の視聴も1割ほどある。最近では大学間の協力関係構築についての問い合わせも来るようになってきている。今後も日本の大学の魅力を積極的に海外へ発信していきたい。

このイベントの収録動画は、「オンライン大学訪問」特設ページのアーカイブ(「さくらサイエンスプログラム」ウェブサイト)で視聴可能となっている。